時局日誌（一）

T　H　生

支那事件は擴大して全面的となり、愈々重大化した。夫れで盡忠報國の精神を日常生活上に實踐すべきことを內閣に於て告諭する所があつたが、更らに國民精神總動員運動を唱道せらるゝこととなつた。乃ち九月十一日には近衞首相、馬場內相、安井文相は馬を街頭に進めて、國家個人一體の大業遂行に協力せよと獅子吼し、全國國民に呼びかけたのである。吾人は未曾有の此國難に直面して最大的決心を以て對處する所がなければならぬ。夫れには時局に對して十分なる認識をもつべきものである。仍て其の一資料として「時局日誌」を提供するものである。

七月七日　午後十一時四十分北平郊外蘆溝橋で夜間演習中のわが軍に對し第二十九軍馮治安麾下の部隊より突如不法發砲、今次事變の導火線となる。

七月八日　彼我兩軍再び銃火を交へ我が軍龍王廟を占據、北平天津に戒嚴令布告さる。

七月九日　午前二時兩軍撤退交渉成立、支那軍は午後零時二十分永定河右岸に一部撤退完了。

七月十日　八寶山の敵と龍王廟の我が軍との間に小戰鬪あり、南京政府逆捻ぢ的抗議提出。

七月十一日　宋哲元、わが支那駐屯軍より提出もる要求三項目全部容認に決す、國民政府は責任回避を聲明すると共に中央軍に進擊を命ず、帝國政府派兵決定同時に聲明を發す「北支事變」と稱することに決定、第三艦隊警備に就く、田代中將病み、後任として香月淸司中將支那駐屯軍司令官に補せらる。

七月十二日　中央軍北上開始、兩陛下葉山より還幸啓。

七月十三日　彼我兩軍馬村に於て衝突、帝

國政府支那の抗議を一蹴す。

七月十四日　南苑で小衝突、川越駐支大使天津着。

七月十五日　北平在留邦人に「引き揚げ勸告」下る、内地派兵決定、緊急地方長官會議召集。

七月十六日　安平にて約百名の支那兵武裝解除。

七月十七日　支那軍の全面的戰時編成なる帝國政府南京政府に覺書手交。

七月十八日　宋哲元香月司令官に正式陳謝

七月十九日　平漢線兀氏―順德上空にてわが偵察機射擊され蘆溝橋にも小競合ひあり、わが駐屯軍重大聲明を發し又大使館附喜多武官より南京政府に最後的警告をなす等事態漸く重大化の兆見ゆ蔣介石事變以來最初の聲明を發す、許世英支那大使歸任。

七月二十日　蘆溝橋に砲火轟き、わが軍宛平城猛攻擊開始、蔣介石廬山より南京に歸る。

七月二十一日　宋哲元の命により三十七師撤退を開始したが宛平縣城の支那軍撤退を肯んぜず松井機關長抗議を提出。

七月二十二日　宋哲元停戰を南京政府に報告し南京政府は現地協定を承認に決定。

七月二十三日　三十七師の撤退續く。

七月二十四日　中央軍熊斌參謀長北平に入る、三十七師の撤退捗らず。

七月二十五日　熊次長冀察首腦と會見即日退京、日支軍郎坊に於いて衝突、支那軍は張自忠の三十八師。

七月二十六日　午前八時わが軍郎坊を占領香月司令官最後通告を發し日支の全面的衝突不可避となる、わが陸軍飛行隊事變以來最初の爆擊に偉功を樹つ、同夜廣安門事件勃發。

七月二十七日　通州駐屯二十九軍獨立三十九旅の約八百名を武裝解除、不安北支を蔽ひ北平の邦人籠城開始、宋哲元一切の公職辭任を通告すると共に對日宣戰を通電す。

七月二十八日　支那駐屯軍は宋哲元に對し最後通告を手交、わが軍より一齊に攻擊開始、南苑の敵兵營、西苑、牛房、清河鎭を占據す商船長安丸太沽附近で射擊さる中央軍長辛店に達す。

七月二十九日　馮治軍及び保安隊北平城内より撤退、我軍黄村宛平を占據、天津市内で日支軍の衝突惹起、市街戰激烈、邦人紡績工場襲はる、我空軍を以つて天津市要所を爆擊、平津一帶を完全に占據す、長谷川第〇艦隊司令長官重大聲明を發す、午後六時通州保安隊突如叛亂を起し冀東政府を襲擊、邦人多數を虐殺す、其慘狀耳目を掩はしめ酸鼻に堪えさらしめた。

七月三十日　北平治安維持會成立、わが空軍通州を爆擊、冀東政府殷汝耕の健在發表、天津に戰鬪續き、わが軍西沽、太沽

を占領、中央軍急遽北上す。

七月三十一日　池宗墨冀東長官代理を命ぜらる天津治安維持會成立、中央政府蔣介石に臨機措置の權限一任。

八月一日　軍隊の行動其の他軍機軍略に關する事項は許可を得たるものゝ外新聞紙に掲載することを禁すとの陸軍省令第二四號が發布せらる、天津治安維持會成立、委員長に高凌霨が決定、天津山海關鐵道開通、張家口領事館引揚完了、汪精衛北支の時局に關し重大聲明を發表す、南京の空氣頓に惡化。

八月二日　北苑駐屯阮玄武の獨立三十九旅の武裝解除。

八月三日　冀東政府北平に臨時辨事處を設く。

八月四日　皇軍北平に入城平漢線開通、內務省全國地方長官宛出征者家族救護通牒を發す。

八月五日　漢口、濟南の排日激化。

八月六日　張自忠冀察政務委員會代理委員長辭任、平津線開通、南京に全國國防會議開催、支那軍漢口包圍、我が居留民引揚げ開始。

八月七日　張自忠北平市長及綏靖主任代理を辭任、冀察政務委員會解體、川越大使上海着、漢口邦人引揚げ完了。

八月八日　各部隊北平入城、〇〇部隊長日本軍入城司令の名を以て治安維持に關する聲明を發表、漢口、九江、沙市、南京、蕪湖等長江筋在留邦人引揚げ完了。

八月九日　北平籠城解散、常態に復す、上海に大山大尉齋藤水兵射殺事件起る、海軍陸戰隊は嚴重支那側の責任を問ひ徹底的解決を期して緊張。

八月十日　上海特別市に戒嚴令布かる。

八月十一日　我が軍南口附近に於て始めて中央軍第八十九師と激突す、支那軍吳淞一帶に塹壕を構築、上海停戰地區內に兵力を增加露骨な挑戰的態度を執る、我が第〇艦隊は兵力を增加警備を固む。

八月十二日　空陸呼應の猛擊によりわが軍南口を占領、一方天津郊外、潤流鎭、良鄉等各方面の殘敵掃蕩も着々進捗、長き邊りよりの繃帶、義眼、義肢を捧じ來津の木下中佐は香月司令官に聖旨を傳達す上海方面に中央軍續々集結攻擊陣形を整備停戰協定共同委員會成果なく在留邦人避難開始、わが陸戰隊配備につく、英國在留民に避難命令發せられ各國居留民保護對策協議會開かる。

國民政府は抗日陸海空軍編成に決定、帝國政府は四相會議を開催萬全の策を決定全面的衝突の前夜なり。

八月十三日　上海にて支那軍遂に發砲、開北西八字橋方面より砲擊し來り、わが軍斷乎應戰、上海市政府移轉、揚子江封鎖さる、國府モラトリアムを施行。

八月十四日　青島浙江路にてわが服部、辻本兩水兵支那便衣隊に狙擊さる、支那機

上海を空襲、市内各所に無軌道な爆撃を加ふ、邦人居留民支那市民、在留外人等多數死傷、わが艦載機出動今次事變最初の空中戰に敵機二機を撃墜、同夜半わが海軍は決然杭州、廣德、南昌等各飛行基地を爆撃多大の損害を與ふ、國府張治中を上海支那軍總指揮に任じ上海、南京一帶に戒嚴令施行帝國政府は「南京政府の反省を促す爲斷乎たる措置をとるの已むなきに至つた」旨の長文の聲明書を發表海軍省も重大聲明を發表。

八月十五日　青島沈市長、水兵狙撃事件に關しわが方に陳謝、海軍〇〇空襲部隊はこの朝〇〇基地を出發、中心示度七四四ミリの颱風暴れ狂ふ魔の支那海を突破、銀翼を連ねて長驅南昌の根據地を空爆。續いて第二回長翔部隊は午後更に支那海を翔破、首都南京を襲ひ敵飛行基地を完全に爆破、敵のSOSを聞きつゝ〇〇基地に歸還、上海八字橋、三義里、新公園方面にて交戰。

八月十六日　我が空軍は再度南京を空襲更に廣德、杭州、蘇州、嘉興、虹橋、龍華、句容各飛行場を爆撃、上海空陸に激戰、八字橋方面にて貴志部隊長戰死を遂ぐ、日高參事官等南京を引揚ぐ。

艦隊、艦船、航空機、部隊の行動其の他軍機軍略に關する事項は許可を得たるものゝ外新聞紙に掲載を禁ずとの海軍省令第二二號が發布せらる。

八月十七日　塘沽西南方小站附近の遭遇戰に於て敵軍を撃退、上海工部局共同租界警備權放棄、廣東、福州邦人引揚ぐ、支那總動員法立法院を通過。

八月十八日　北支にて〇〇部隊〇〇機は德勝口、水清、延慶縣城方面の北部山岳地帶の敵を爆撃大損害を與ふ、上海戰線激戰續く、わが空軍更に南京爆撃を敢行、支那軍浦東碼頭に繫留中の日清汽船岳陽丸以下五船を沈没。

八月十九日　冀察政務委員會解散正式決定江朝宗氏北平京長に就任、上海閘北及び楊樹浦方面の敵軍に殲滅的損害を與ふ、わが空軍又も南京空襲、火藥庫を爆破せしむ。

帝國政府は北支事變を日支事變と改稱す

八月二十日　北支長辛店で有力なる中央軍と交戰す、山西軍察哈爾省に向け前進行動を開始、上海方面全線に亙り海陸の激戰續く、國民政府對日經濟斷交を決定。

海空軍長驅廣德、九江の敵飛行基地を爆撃す、支那の砲彈米國極東艦隊旗艦オーガスタ號に落下死傷十九名。

八月二十一日　關東軍張家口を爆撃海軍機閘北、寛橋飛行場を空爆、上海上空にて空中戰、山東に中央軍進出、青島に危機迫り邦人婦女子全部引揚ぐ。

八月二十二日　海軍機七度南京を襲ひ、兵器廠を爆撃、これと相呼應するが如く陸空軍もこの日平綏線要地懷來新保安、延

慶を爆擊、地上部隊は平漢線新家口を拔く。

國府主力を上海に集中す。

八月二十三日　沿岸に堅固なる陣地を構築盲擊ちに猛射する敵軍を物ともせず我が陸軍部隊は上海附近の某地點に勇猛極まりなき敵前上陸を敢行、この日海陸空軍渾然一體の協同作戰は正に近代立體戰史に壯麗なる一頁を加へた、かくて海に、陸に、空に我が軍一齊に總攻擊を開始、海軍機縱横に活躍、兼子正中尉の指揮する四機は二十七機の敵編隊機と遭遇、寡よく衆を制し遂に敵九機を擊墜して無事歸還、我が空軍の名彌々高し、支那側の砲彈上海共同租界のデパートに命中外人を含む百數十名の死傷者を出す。

八月二十四日　天下三關の一居庸關一帶は遂に我が軍の占據する所となる、我が軍懷來平野に進攻、平綏線の大同の空爆敵の退路を斷つ、蒙古軍も我と協力奮戰す赤柴部隊津浦線靜海を占據、海空軍は崑山、嘉定、太倉、寧波、安慶、吳淞鎭の敵軍陣地を矢繼早に爆擊す、南京にも第八次爆擊を加ふ。

八月二十五日　長谷川第〇艦隊司令長官は揚子江口より汕頭に至る六百八十哩の支那沿岸の支那船舶航行を遮斷の宣言を發す、但し第三國船舶の航行は自由、關東軍張家口に進擊察哈爾西方の敵軍全滅に瀕す、津浦線、平漢線に於ても激戰を展開す、青島の邦人は總引揚の內命下る。

八月二十六日　海空軍は又も南昌飛行場を空襲、十四日よりの支那空軍の損害は百七十六機に達す、我軍は僅か十六機を算ふるのみ、我れに挑戰せる支那軍艦墩日（五〇〇トン）は我が砲擊により瞬時にして揚子江の藻屑と化す。

平綏線進出以來「八達嶺へ、八達嶺へ」と我が將士の夢寢にも忘れ得ざりし天下の險八達嶺遂に我が手中に歸し玆に平綏線一帶を確保す。

南支の航行遮斷に關し外務省より第三國の通商はこれを尊重する旨の聲明を發す

駐支英大使ヒューゲッセン氏は我が軍に何等の通告なく南京より上海に向ふ途中飛行機上より掃射を受けて負傷すと傳ふ

八月二十七日　我が陸軍後續部隊上海附近に敵前上陸殷行鎭を占據す、海空軍又も南京を空襲、更に上海一帶を完膚なきまでに爆擊して上陸部隊を掩護す。

平漢線の我が軍進出し良鄕西北の高地を占據。

八月二十八日　敵前上陸部隊は激戰の後羅店鎭を占領す、海空軍南停車場をはじめ敵の本據を爆擊平漢線の要地陀里村、花石片を占據、支那側ではわが航行遮斷に對抗して南支沿岸防備の嚴命を發す。

八月二十九日　蘇支不可侵條約の成立を南京政府發表す。

敵前上陸戰鬪に倉永部隊長戰死、陸軍航

空隊北支の空に活躍、津浦、平漢、平綏各線の皇軍着々と進攻す、英大使遭難事件につき英政府我に通告を發す。

八月三十日　支那空軍吳淞沖に碇泊中の米船P・フーパー號に爆彈を投下死傷者を出し全世界に一大衝動を與ふ、北支にてはわが空軍、蔚縣、西河營、來源の敗殘敵兵を空爆す。

八月三十一日　後續部隊又も敵前上陸を決行す、陸、海、空軍の協力により〇〇鎭、吳淞砲臺を占據、海軍機長翔して南支、廣東、漳州、留關の敵飛行基地を急襲、津浦線王口鎭を占據、平綏線柴溝堡以東を確保す。

九月一日　陸軍省より支那軍のダムダム彈使用發表さる、敵の大部隊吳淞奪還を企てゝならず我が陸軍部隊はじめて上海に上陸、淺間部隊獅子林砲臺占領、香港市政府在留邦人保護策を考究。

九月二日　今次事變を「支那事變」と改稱するに決定、上陸陸軍部隊の連絡成る、海軍航空隊眞茄無電臺を爆擊潰滅せしむ陸軍鷹森部隊大金家鎭を占據、青島居留民最後の引揚げ實行、大鷹總領事悲愴の聲明を發す。

九月三日　浦東の敵わが上海總領事館を攻擊上海に激戰展開、察哈爾假政府樹立決定、顧祝同支那軍前線總司令に決定、津浦線の中井部隊子牙鎭に迫る。

九月四日　赤柴部隊は唐官屯の殘兵を掃蕩し陸軍機の協力を得て敵の堅陣馬廠に追込み張家口を占領した長谷川部隊亦山西省に突入、上海戰線では閘北の北停車場と商務印書館附近の敵砲兵陣地に猛烈な空爆を浴せると共に陸軍各部隊寶山縣城に迫る我が驅逐艦〇隻厦門を砲擊廣東軍を痛擊す

天皇陛下第七十二臨時議會開院式に臨御異例の勅語を給ふ。

九月五日　上海に於る上陸々軍部隊の進擊により一氣に金家宅曹家濱を陷し入れ遂に寶山縣に日章旗を飜へす、淺間、天谷兩部隊の聯絡成る、海軍航空隊又油尾、姫宮の兩要塞、要港海州等を空爆、眞茄の地上掃射に武威を擧げた去月二十五日以來南支那海の航海遮斷を行つてゐる第〇艦隊は更に第〇艦隊と共同全支海岸の航行遮斷を實行する旨午後六時發表同時に廣田外相よりこの旨說明される。

九月六日　午前六時陸海軍相呼應して上海市政府を猛擊更に眞茄蘇洲河上流並に上海軍工路に向つての陸海軍の砲擊激烈を極め石井部隊は亦虬江碼頭に敵前上陸を敢行我が軍は界濱港を越えて前進した北支の赤柴部隊は朝來來馬廠に向つて猛擊を加へてゐる。

九月七日　上海の陸海軍部隊は東部戰線に於て敢然攻擊に轉し我陸軍機は浦東の敵砲兵陣地を潰滅、海軍機は亦蘇州上空で敵戰鬪機十機と空中戰鬪を演じ四機を擊

墜した、津浦線沿線に於ては我が重田部隊は人和鎭の敵兵營及馬廠驛馬廠河岸の敵陣を砲擊平綏線に於ては山西省に侵入した我が〇〇隊は天嶮による敵の大軍を擊破神田岡本兩部隊は北平西五十キロの千君臺の敵を擊破す

九月八日　上海滬江大學の北に陣取つた飯田部隊は七日夜夜襲で界濱巷クリーク北側第一第二トーチカを奪取、八日は早朝から陸海空の砲爆擊に掩護されつゝ北進虬江埠頭から軍工路正面を衝き部隊を二分して前進午後二時五十分第三トーチカを占據、夕刻梶野部隊の砲擊に力を得て勇敢なる敵前渡河を敢行して午前七時第四トーチカを占據した、これ等トーチカは何れも半永久的な堅固な裝置だつただけに我が軍の進擊は物凄いものがあつた淺間部隊は七日午後沙龍を占據、天谷部隊は八日正午月浦鎭東三百米の線まで、鷹森、石井兩部隊は廟家宅、沈家橋沈家宅の線まで川波部隊は八日正午撒家宅、李家宅の線まで夫々進出した、尙敵二機は八日午後七時四十分虬江に飛來したが我が水陸からの砲擊によつて一機は擊墜された。

海軍航空部隊は七日午後前日に引續き廈門を空襲要塞重要建物を空爆した、香港南方の支那領プラタス島（東洲島）は去る三日我軍に占據された。

北支津浦線靜家屯南方の敵陣を砲擊せる重田部隊と呼應して七日夕赤柴部隊が前進を開始し、東靜家屯を陷れ馬廠への堤防を挾んで敵と對峙中である。

九月九日　臨時帝國議會（七二回）は閉院式を執行。聖旨奉體の告諭が發布せられ又同趣旨の內閣訓令が發令せられた。上海方面では此日午前二時頃我が飯田部隊が多大の努力を以て占領した軍工路の最要害の地區に向つて大部隊の敵が大擧逆襲し來つた、我軍寡克く陣地を固守し飯田部隊長及梅田中尉、森田少尉は犧牲となつたが、援軍を得て進擊虬江埠頭前面の新築トーチカを奪取した、更に淺間部隊は午後三時月浦鎭を占領した。

海軍部隊にあつては九日軍工路の地上部隊の活動のため掩護爆擊を行ひなほ支那街南市の上空よりビラを撒布し別隊は程近い龍華附近の敵陣を爆擊、楊樹浦前面の浦東側スタンダード石油タンク附近に新たなる陣地を築いて盛んに我方を砲擊し始めた敵に對しても痛擊を加へた。

更に又南京及び杭州方面との敵の連絡を斷つため九日崑山と松江附近に於て鐵道線路の爆破工作を行ひ多大の効果を納めた。

北支津浦戰線、本戰線の先鋒を承る赤柴部隊は、側背より屢々我軍に襲ひかゝる敵に對し友軍の手により排擊しつゝ前面の馬廠を攻略すべく連日奮鬪を續けつゝあるが、九日より〇〇の位置を敵の最前

線近くに移し同時に愈々本格的の攻略戰に入つた。

平綏鐵路に沿ふて山西省に進擊せる〇〇部隊は八月航空部隊の爆擊作業に援けられつゝ大同の前衞と目すべき陽高縣城を死守する山西軍を猛擊、午後九時堂々入城、午後五時には鎭宏堡も占領した、一方天鎭縣城内の敵を包圍攻擊中の堤部隊は八日夜完全にこゝを占領した。

九月十日 第七十二議會の協賛を經たる支那事變に關する臨時軍事費支辨の爲公債發行に關する法律(八四號)、臨時軍事費特別會計法(八五號)、臨時資金調整法(八六號)、外國爲替管理法中改正法律(八七號)、軍需工業動員法の適用に關する法律(八八號)、臨時馬の移動制限に關する法律(八九號)、米穀の應急措置に關する法律(九〇號)、臨時肥料配給統制法(九一號)、輸出入品等に關する臨時措置に關する法律(九二號)、臨時船舶管理法(九三號)及昭和十二年度歳入出總豫算追加並臨時軍事費豫算(二、〇二三、六七一、一五八圓)が公布せられた。

北支津浦縣戰線にありては九日午前六時馬廠總攻擊の命令が發せられた以來着々攻擊を加へ流河鎭を奪取し次に馬廠河を突破して西方陣地前屯を占領した。

平綏戰線にては大同の手前僅かに八里の地點に在る聚樂堡の敵陣地に爆擊を加へた。

上海方面では沈家行鎭附近の大敵を猛擊し楊行鎭附近に迫つた淺間部隊は月浦鎭の攻擊を開始した。

九月十一日 去る九日の内閣告諭に基き愈々國民精神總動員運動を起すこととなつたので馬場内相は午前九時頃全廳員を大會議室に召集して一場の訓示を試みられた。此夕政府主催にて日比谷公會堂に於て「國民精神總動員大演說會」を開催し近衞首相、馬場内相、安井文相各其の所信を演說し大喝采を博した。

北支津浦戰線では馬廠總攻擊に依り敵は總崩れとなり馬廠は遂に陷落したが南方三里の地にある要地青縣をも占領した。

上海方面地上部隊では陸軍部隊に協力して前日滬江大學二陣地を占領した海軍陸戰隊は昨朝有力なる敵の逆襲を受けたが之を擊退してよく戰線を確保した、然るに軍工路西方の敵は執拗にも後方の遠東競馬場、市政府方面より更に續々增援部隊を繰出しつゝあつて同方面は再び激戰を免れぬ形勢となつた、田上部隊は十日夜楊行鎭左翼前面の吳家宅、莊家上等の陣地を、石井部隊は十一日午後その右翼前面の廟村の陣地をそれ〳〵奪取し、相並んでいよ〳〵楊行鎭に肉薄するに至つた、一方羅店鎭東方に殘留の敵は前日の我軍の月浦鎭占領により前後より脅威さるるに至つたため漸次南方へと退却し始めた。(以下次號)